

## インド密教における曼荼羅の変遷

黒木賢一

### 1) 曼荼羅の原型

仏陀の入滅後、釈尊の遺骨を納めた仏塔（ストゥーパ）が仏陀とその教えを象徴しているとして崇拝対象として形作られていった。図1のように、多くの仏塔の壁に描かれた彫刻には、弟子たちは人の姿で表現されているが、釈尊は菩提樹、法輪、足跡などの象徴化されたもので描かれており、決して人の姿で描かれなかった。なぜならば仏陀は生前から偶像崇拝を否定していたからである。また、仏陀に供え物を捧げて礼拝する儀礼（プージャー）が一般的になった。この供養では、花、水、食べ物などが捧げられた。そして、1世紀頃には、礼拝対象としての仏像が作られ始めた。仏塔と同様に仏像に対しても供え物をささげることで功德を積むと考えられるようになった。仏像への投影によって「人格神」というイメージが出現することで、修行者のモデルとしての「釈尊」から私たちに救済する「阿弥陀仏」へと変化していったのである。これは釈尊への思いを人格神としてとらえ拝むことで、現在でも教えを説いている仏に近づくことを願う信仰である。

2世紀ごろには『阿弥陀経』『無量寿経』などの浄土経典が盛んに読まれるようになり、浄土経典に現れる阿弥陀如来は、自分の名を唱えると極楽浄土に生まれることを約束するといった、死後のことを問題にした。釈尊は、死後どこに行くのかの問いには答えなかった。『法華経』では、仏塔・仏舎利崇拝が重視され、さまざまな仏として菩薩が登場する。このように法（ダルマ）（以下、ダルマと表示）を重んじる小乗仏教から大乘仏教に移ってくると、菩薩信仰と共に修行の仕方にも変化が起こってきた。

小乗仏教では人間の煩悩を減ずるための禁欲的な修行から、大乘仏教では六波羅蜜（布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧）という仏になるための菩薩行が重視されるようになった。菩薩とは「悟りを求める人」という意味で、悟りを開く前の釈尊に対する敬称だったが、修行中の過去仏や未来仏である弥勒に転用され弥勒菩薩という概念ができ、観音菩薩、普賢菩薩、文殊菩薩などの多くの菩薩が信仰されるようになったのである。菩薩の修行の階梯を表した『華嚴経』が編纂され、普賢菩薩の行について言及されるようになった。

『華嚴経』において、ブツダガヤで悟りを開き、ダルマと一体化した釈尊を光り輝く仏「ヴァイローチャナ（毘盧遮那仏）」と表現し、宇宙的仏と理解するようになり、そこから密教の「大日如来」へと変化したのである<sup>1)</sup>。このような時空を超えた仏とは何かという

1) 『両界曼荼羅の誕生』P 31-32

(図1) エーラパトラ龍王の帰仏



(『両界曼荼羅の誕生』より)

(図2) マトゥラー仏三尊像



(『両界曼荼羅の誕生』より)

議論が起こり、仏の身体とその根拠が議論されるようになった。そして「三身説」が想定されるようになった。仏のダルマを人格化した「法身」、この世に生まれて修行をして実際に衆生を救う仏を「応身」<sup>2)</sup>、修行を続け、菩薩が悟りを開いて仏になった「報身」<sup>3)</sup>である。

このような「三身説」の考え方が加わることで、礼拝対象としての独尊の仏像が作られたが、後には釈迦・弥勒・観音の三尊形式で多く作られるようになったのである。

図2のマトゥラー仏三尊像は、向かって左から観音、中央が釈迦、右が金剛手となっており、やがてこの三尊形式は原初的な曼荼羅へと発展していく<sup>4)</sup>。

初期の曼荼羅の原型は、向かって中央が釈迦如来を中心とするグループ、左側が観音グループ、右側が金剛手グループに分かれており、血縁関係のある一族によって「部」が作られているようになる。このように釈迦・観音・金剛手の三尊形式が発展して、初期の曼荼羅では仏部・蓮華部・金剛部の三部が成立していくのである。この三部は、後に『大日経』に基づいて修行する際に「身」、「口」、「意」の三密に置きかえて、行法の中に取り入れられていった。

## 2) 密教の発展過程

日本においては、弘法大師空海(774-853)によって日本に伝えられた。『大日経』と『金剛頂経』を中心とした密教を「純密」と呼び、それ以前に成立し、組織的ではない初期密教を「雑密」と呼び慣わしてきた。日本では、中期密教を中心に栄え、その伝統が今日まで引き継がれている。空海が亡くなったのは834年であり、中国にもたらされた密教の伝統は800年ぐらいで途絶え、800年~1200年までの密教の伝統は中国・日本では取り残され

2) 従来の人間間釈尊を、「色身」から「応身」に呼ばれるようになった。

3) 「報身」の座とされる色究竟天は物質的身体をもつ衆生世界(色界)の最上位にある。

4) 本尊では、向かって中心に釈迦、右側に蓮華を持つ観音、左側に金剛杵をもつ金剛手の三尊形式の祖型。

たままであった。

チベット・ネパールには、600年から700年頃に大乘仏教が伝えられた。その後、800年から1200年までのインド後期密教の伝統を、濃厚に受け継ぎ発展したのがチベット密教である。チベット密教の学者プトゥンが『チベット大蔵経』の編纂に関して、インド密教の聖典を、所作・行・瑜伽・無上瑜伽と四種類に分けた。これが「タントラ四分説」<sup>5)</sup>である。したがって、曼荼羅を理解するには、所依つまり典拠となる密教教典を知ることが必要になる。11世紀初頭にはじまるイスラム教の北インド各地への侵入と破壊行為は仏教教団に大きなダメージを与え、ついに仏教はインドの歴史の表舞台から姿を消す。インド密教の発展過程を日本とチベットの教典と比較したものが表1である。

(表1) 日本とチベットの密教教典<sup>6)</sup>

	日本密教	チベット密教
初期	雑密教典	所作タントラ
中期	『大日経』(胎藏)系 『金剛頂経』(金剛界)系	行タントラ 瑜伽タントラ
後期		無上瑜伽タントラ ①父 ②母 ③不二

所作部(雑密)の教典は、印、真言(マントラ)を説き、仏や菩薩に対しての供養法、礼拝法、結界法などの内容にあたる。

行部(大日系)教典は、大乘仏教の思想的な裏付けがあり所作の教典を深化させたものである。

次に、瑜伽とは、サンスクリット語のヨーガー(yoga)という言葉の音を訳したものである。ヨーガー(ヨガ)は呼吸法と身体運動を通じた健康法として広く行き渡っており、様々な流派があるが、瑜伽部(金剛頂系)の教典では、大乘仏教の経典を背景に内面的な観法が成立している。また、二つのものを結びつけるという意味が含まれており、行者と本尊、小宇宙と大宇宙、こころと身体などを合一するために、三密(身・口・意)を通して行われる。チベットでは、すでにインドでは失われた密教が今なお生き続けている。師匠から弟子へと口伝で説かれた宗教的体験がそこにある。その体験を伝える場こそが、密教独特の儀礼と実践体験である。

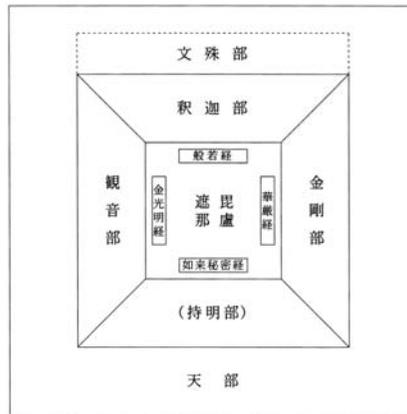
### 3) 初期密教の曼荼羅

4世紀頃になると大乘仏教の理論的体系の整理が終わった頃であり、また、ヒンドゥー教との対立を迫られていた。仏教の本来の救済は煩惱を断ちきり涅槃に入ることであったが、世俗に生きる大衆の願いを叶えるには儀礼、呪法、土着の神々を取り入れながら変化せざるを得なかった。釈尊が生まれる以前には、ヴェーダ聖典に基づくホーマという儀礼

5) 『図解チベット密教』P178

6) この図は、田中氏の『図解チベット密教』P178で記載された図を筆者が書き換えたものである。

(図3) 『蕤呬耶經』の曼荼羅



(『両界曼荼羅の誕生』より)

が盛んに行われていた。ホーマとは供え物を火の中に捧げる儀式であり、病気治癒などの現世利益を願っておこなわれた。このような儀式が復活してくる。そして、呪術的な方法により、雨乞いの祈祷、病気治し、仏との一体感を通して功德を積むといった実践体系が仏教に加味されることで、大きな変化を遂げていく。

田中<sup>7)</sup>によれば、初期の經典『蘇悉地羯羅經』<sup>そしつち かのらきょう</sup>では、三部構成（仏部、蓮華部、金剛部）の諸尊に色々な分担をさせているという。三部を部族になぞらえて、族長（部主）、族長の夫人（部母）、衛兵（忿怒尊＝明王）がいると考えた。仏部では、部主は釈迦如来・部母は仏眼仏母・忿怒尊は最勝仏頂、蓮華部では、部主は観音菩薩・部母は白衣観音・忿怒尊は馬頭観音、金剛部では、部主は金剛手菩薩・部母はマーマキー・忿怒尊は孫婆明王である。また、民衆の願いを叶えるために、尊格を選び修法を当てはめたのである。仏部の尊格は無病息災・病気平癒などの「息災法」、蓮華部は金運財運・商売繁盛などの「増益法」、呪詛・怨敵退散などの「降伏法」と諸尊が役割を担うことで、民衆に応えたのである。

また、図3の初期密教經典の『蕤呬耶經』<sup>すき やきょう</sup>の曼荼羅は中期密教に代表される『大日經』『金剛頂經』につながるものとして次のように説明している。

中央の蓮台上の尊格が、釈迦如来から毘盧遮那仏（大日如来）に変わっていること。三部形式に基づき、内院に向かって、中央には毘盧遮那仏（大日如来）、左には観音をはじめとする蓮華部の尊格群、右には金剛手をはじめとする金剛部の尊格群が配置されている。その四方には『般若経』『華嚴経』『如来秘密経』『金光明経』を安置し、その外側は二重の方形となるが、四仏が位置され、中央の毘盧遮那仏をいれると五仏になっている。また、この曼荼羅では、原初的な胎藏界曼荼羅に存在した十一部のうち、すでに観音部・金剛部・釈迦部・文殊部・天部の五部がすでに成立しており、中台八葉部と持明部も途中形成であっ

7) 『曼荼羅イコノロジー』P 58

ただろうという。

#### 4) 中期密教の曼荼羅

中期密教の曼荼羅は、弘法大師空海が中国から日本に請来した胎蔵曼荼羅と金剛界曼荼羅があり、これらを「両部曼荼羅」という。また金剛界曼荼羅に合わせ胎蔵(界)として、両界曼荼羅とも言われている。胎蔵曼荼羅の教典は『大日経』であり、単一の教典から成っている。金剛界曼荼羅はいくつかの経典からなっている『金剛頂経』であり、その中でも基本となるのが『真実撰経』である。この経典は、『初会の金剛頂経』ともいわれている。『大日経』と『金剛頂経』は成立した時期は異なっているが、両部曼荼羅として並べる様式は、空海の師の恵果によるものであると言われている。当時インドにおいては、『金剛頂経』は発展途上の教典であったが、『大日経』は漢訳されており、注釈書である『大日経疏』も出来上がっていた。

##### 1 胎蔵(界)曼荼羅の構造

胎蔵曼荼羅の正式名は「大悲胎蔵生曼荼羅」といい、胎蔵の原義は「子宮」あるいは「母体」を意味している。これは胎児が母体の中で安全に育つ姿をたとえて、私たちが生まれながら存在している大なる慈悲の胎蔵(菩提心)が生じるための曼荼羅である。この曼荼羅は『大日経』に則して描かれており、正式な名称は『大毘盧遮那成仏神変加持経』という。この教典は、開元十二年(七二四)にインド僧の善無畏三蔵一門によって訳された。教典の意味は、大毘盧遮那如来、つまり大日如来が成仏した如来が神変と加持によって開示したものである。仏教は伝統的に釈尊の説を前提にしているが、『大日経』は大日如来を教主とし、人間釈尊としての「応身」ではなく、真理を人格化した「法身」を大日如来として捉えている。『大日経』の思想体系は、第一巻「入真言門住心品第一」に教義の大綱が説かれている。第二巻「入曼荼羅具縁真言品第二の余」以降は具体的に曼荼羅の作図法、観想法、護摩法などが記されている。

第一巻の教義では、「三句の法門(教え)」と呼ばれる大日経の精神が全編にわたり構成されていると言ってよい<sup>8)</sup>。『大日経』では、衆生を代表する金剛主(或いは秘密主)という名の菩薩が大日如来に質問して応えるという形式になっている。

金剛主が問いかける、

「仏の智慧とはどのようなものなのか。」

それに応じて、大日如来は、

「悟り求むるその心(菩提心)因とぞなして、さらにまた、大けきあわれみ(大悲)根として、手だて(方便)を究竟となせよかし。」

<訳: 悟りを求める心をその(原)因として、さらに、仏のおおいなる慈しみの心を根(拠)として、正しい有効な働きを究極の目的としない>

8) 『すぐわかるマンダラの仏たち』P 20-42,

さらに対応して

「秘密主よ、まず、悟りとはありのままの自らの心知ることぞ。」

<訳：菩薩よ、悟りとはありのままに自分の心を知ることだ。>

大日如来は、「悟りとはありのままに自分の心を知ることだ」と応えた。悟りに至るための「ありのままな自分の心」とは何か。宮坂<sup>9)</sup>は、大日経には、人の本来の心には仏と同じく清らかなものであるという仏教に一貫した教えが通底しているという。そして、悟りが究極の目的ではなく、その教えにもとづいてどのように生きるか（悟りを求める心〔菩提心〕）であり、常に他者を思いやる心（慈しみの心〔大悲〕）を根本として、その上で〔方便〕を究竟とする、すなわち、たゆまず実践せねばならないという。

日本に伝わっている胎蔵曼荼羅は「十二大院」と呼ばれる十二の区画から出来ており、この「菩提心」、「大悲」、「方便」の三句にしたがって、三重の構造（初重、二重、三重）になっている。大乘仏教から密教の時代に入るときに多くの新しい仏が登場することで、仏たちの起源、性格、機能などにより分類されたのである。

初重は中央の「中台八葉院」にあたり、大日如来を中心に、宝幢如来（東）、開敷華王如来（南）、無量寿如来（西）、天鼓雷音如来（北）という四仏と、普賢菩薩（東南）、文殊菩薩（南西）、観音菩薩（西北）、弥勒菩薩（北東）という四菩薩が座している。そして、中台八葉院を囲んで遍知院、時明院、観音院（蓮華部院）、金剛手院がある。二重には、釈迦院、虚空蔵院、文殊院、地蔵院、蘇悉地院、除蓋障院がある。三重は外金剛部院（別名は最外院）といい、ヒンドゥー教から参入した大黒天、弁才（財）天など庶民の仏が座しており、東方三十九尊、南方六十二尊、西方四十九尊、北方五十三尊で、計二百二尊が座している。胎蔵曼荼羅は全部で四百十尊の仏、菩薩、天で構成されている。

日本に伝わった胎蔵界曼荼羅は遺品がまったく伝わっておらず、『大日経』の本文に基づいて理解するしか無かったと言われており、チベットに伝えられた「大慈胎蔵生曼荼羅」はより『大日経』の所説に忠実であり、また初期密教の曼荼羅に比べると次のような5つの特徴があるという<sup>10)</sup>。第1は、密教における「身・口・意」の概念が曼荼羅にあてはめられた。諸尊を尊形で描く曼荼羅は如来の「身密」、種字で描く種字曼荼羅は「口密」、諸尊を象徴的な法具で描く三昧耶曼荼羅は「意密」を示している。第2は、基本的には仏部、蓮華部、金剛部の三部構成になっている。第3は本尊が釈迦から毘盧遮那に変化した。このことは大変大きな変化であり、日本の真言宗とチベット密教とでは異なる解釈がされている。第4は中央に八葉があり、四方に四仏をおく。第5は中台八葉と初重、二重、三重の三層構造になっている。

大日経の第二巻「入曼荼羅具縁真言品第二の余」以降は具体的に曼荼羅の作図法、観想法、護摩法などが記されている。『大日経』の秘密曼荼羅品第十一（第五巻・抄）では、

9) 「胎蔵界曼荼羅の見方・考え方」、『特集Ⅱ これで分かる<曼荼羅>。』P 76-79

10) 『曼荼羅イコノロジー』P 65-67

(図4) 胎藏曼荼羅

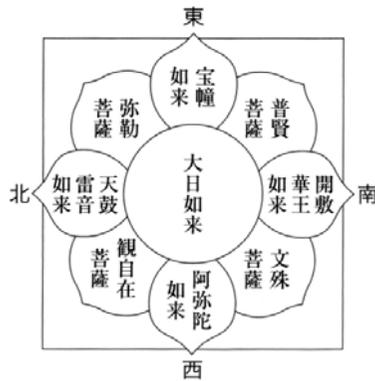


(『マンダラの仏たち』より)

(図5) 胎藏曼荼羅の名称



(図6) 中台八葉院



(『マンダラの仏たち』より)

大宇宙としての五大要素である「地・水・火・風・空」を小宇宙としての人間の身体の部位に配当している。密教に身体論を初めて導入したのは『大日経』であった。

「真言行者は円壇を，先ず自らの体におけ，足より<sup>ほぞ</sup>臍に至るまで，大金剛輪を成じつつ，これより心に至るまで，<sup>ま</sup>当に水輪を思惟すべし。水輪の上に火輪あり，火輪の上に風輪あり。応に次地を念じつつ，衆の形像<sup>もろもろすがたえが</sup>図くべし。」<sup>11)</sup>

<訳>

修行僧は自らの身体にマンダラを観想し，足より臍までの部位に大金剛輪（地輪）を，臍から心臓までの部位を水輪のイメージをもち，その上位に火輪，風輪とイメージしながら身体内のエネルギーを動かしていくのである。

11) 『和訳大日経』 P 9-10

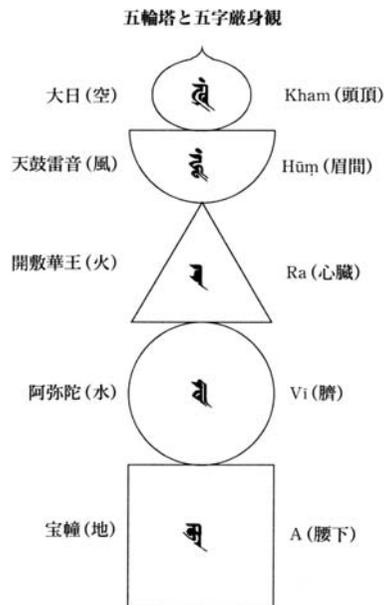
観想法として、大日如来の五大の種子、ア (a, 地)、ヴァ (va, 水)、ラ (ra, 火)、カ (ha, 風)、キャ (kha, 空) を、自身の腰下・臍下・胸・眉間・頭頂の五カ所の部位にあてはめ観想する「五字<sup>ごしんかん</sup>厳身観」がある。また「ア=阿」字のみを集中する阿字観も行法の一つである。これらの五字は胎蔵曼荼羅を構成する五仏の種字であり、自らの身体に五字をイメージ化させ、大日如来を象徴する五輪塔となることで、仏の身体に変容すると考えた。その方法論は手に印を結び、口に真言を唱え、心を三昧（実際は曼荼羅）に集中する三密行を通して、特定の仏に対して、入我我入（一体化）しようとする本尊瑜伽である。

中期密教になると、初期のインド密教の中に取り入れた呪法を、大乘仏教の思想の中に同化させ、観想法として深化させていく。後期密教ではこの5つの部位が「チャクラ」すなわち「輪」とよばれるようになり、『大日経』の段階では、生理学的なヨーガは未発達であったが、後期密教のチャクラは五輪説から発展したと言われている<sup>12)</sup>。このように修行者は胎蔵界曼荼羅の五仏の種字をヨーガの技法を用いて、身体に合一させることで、釈尊が辿った悟りの道に近づく修行を行うのである。

## 2 金剛界曼荼羅 (1)

インド密教における金剛界曼荼羅は、日本だけではなく中国、チベット、ネパールにおいて重要視されており、七世紀後半中期密教の代表的な教典である『金剛頂経』に則って描かれた曼荼羅である。『金剛頂経』は十八の教典からなる膨大な教典群のことであり、

(図7) 五輪塔と五字厳身観



(『性と死の密教』より)

12) 『性と死の密教』 P 110

もっとも重要な内容が書かれているのは『金剛頂経』（『真実撰経』或いは『初会の金剛頂経』）という。

日本では、金剛界曼荼羅は不空三蔵が訳出した『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王』（略称『真実撰経』）を重視している。これは初会第一「金剛界品」の大曼荼羅の部分を取ったものであり、金剛とはダイヤモンドを意味する金剛石や武器としての金剛杵のように最も堅固で最高な教典として捉えている。『金剛頂経』の教主は、「毘盧遮那如来＝大日如来」であり「釈尊」のことを意味している。釈尊は歴史的に現存した人物であり苦行を通して悟りを得て「仏陀」になった。仏教徒は、釈尊が得た「悟りのリアリティ」とは何かを、問題にしてきた。それに応えているのが『真実撰経』の初会第一「金剛界品」である。

弘法大師空海が請来した「現図曼荼羅」は胎蔵曼荼羅と金剛界曼荼羅が二対一組として親しまれている。現図金剛界曼荼羅は『金剛頂経』と『般若理趣経』に基づいて成り立っており、全体が九つの部分の一つで「九会曼荼羅」と呼ばれている。このような構造をもったものは日本だけで、中央の部分（成身会）だけが描かれるのが一般的である。金剛界曼荼羅は成身会を基本としているがゆえに、成身会を「根本会」ともいう。図8の金剛曼荼羅の構造は九つのブロックに分かれており、図9はその名称を示している。

#### ①成身会

成身会は金剛界曼荼羅の中央に位置しており、五相成身観により仏身を成就したという意味で、すべての曼荼羅の根本となるがゆえに「根本会」と称されている。金剛頂経の教えを仏たちの尊形で描き、その活動を表していることから羯磨会ともいわれている。

#### ②三昧耶会

三昧耶会は成身会の下、すなわち東に位置している。成身会の内容を尊像で描くのではなく象徴する器物（例えば、宝塔、五鈷杵、羯磨杵、宝珠、日輪など）、<sup>さんまいやぎょう</sup>「三昧耶形」で現している。三昧耶形を通して仏に出会う。

#### ③微細会

微細会は成身会の南東（下段向かって左）に位置しており、『金剛界品』には「法曼荼羅」としてとかれている。成身会の内容を、文字もしくは音で表現しようとしており、中央に位置する三十七尊は微細な金剛杵の光背を受けており、大日如来の微細な知恵が行き渡っている。

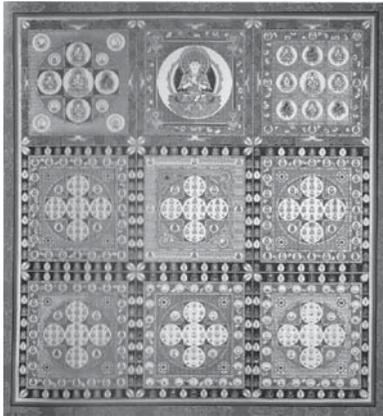
#### ④供養会

供養会は成身会の南（中段向かって左）に位置しており、『金剛界品』には「羯磨曼荼羅」として説かれている。供養会の構造は微細会と同じである。十六大菩薩が天女形となって如来を供養することを説いている。

#### ⑤四印会

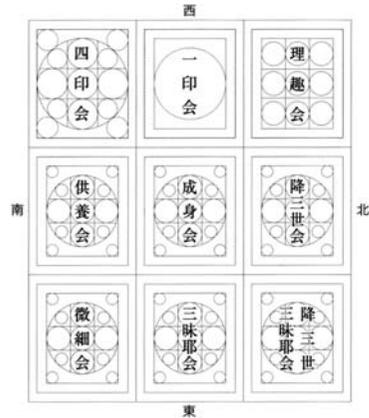
四印会は成身会の南西（上段向かって左）に位置している。成身会の内容を簡素化し、代表的な尊格のみで表現したものである。五仏である大日如来を中心に十六大菩薩の各包圍の代表となる金剛薩埵（東）、金剛宝（南）、金剛法（西）、金剛業（北）の四菩薩の働きを現している。

(図8) 金剛界曼荼羅



(『マンダラの仏たち』より)

(図9) 九会曼荼羅の名称



#### ⑥一印会

一印会は成身会の西（上段中央）に位置している。成身会を一尊，大日如来のみで表現している。大日如来を観察し，仏身と一体化することで「即身成仏」の教理を現す。

#### ⑦理趣会

理趣会は成身会の北西（上段向かって右）に位置している。『金剛頂経』の「理趣経」を典拠として表現されている。この会のみ大日如来が登場しない。中央の金剛薩埵を囲む欲，蝕，愛，慢の四金剛菩薩と四金剛女は煩惱を現しており，煩惱即菩提という金剛界曼荼羅の教えが描かれている。

#### ⑧降三世会

降三世会は成身会の北（中段向かって右）に位置している。『金剛頂経』の「初会金剛頂経」のうち「降三世品」を典拠して表現されている。素直に教えに従わないものに，金剛薩埵が忿怒形の降三世明王となり，仏の教えに導き入れるのである。降三世とは，貧・瞋・痴の三毒を示し，調伏することを意味している。

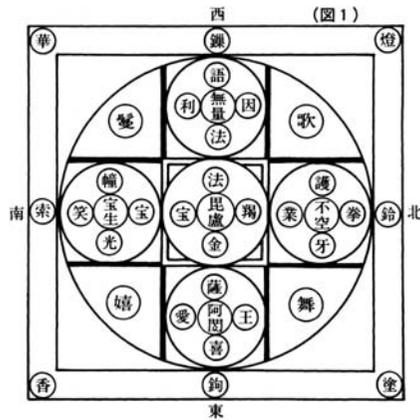
#### ⑨降三世三昧耶会

降三世三昧耶会は成身会の北西（下段向かって右）に位置している。『金剛頂経』の「初会金剛頂経」のうち「降三世品」を典拠して表現されている。降三世会の諸尊の働きを持ち物などで現している。

図10は，金剛界曼荼羅の中枢である「成身会」であり，大日如来等の五仏と菩薩たちの三十二尊を中心に以下のように構成されている。そこには三つの枠があり，初重には，大円輪，中円輪，小円輪がある。大円輪の中に五つの中円輪があり，その中に小円輪が五つあり尊像が描かれている。大円輪の中に中円輪の五つが五つの部族を形成しており，その中心に「五仏」の如来が座している。

中央の円は如来部（仏部）があり，毘盧遮那如来（大日如来）が鎮座し，その回りに女

(図10) 成身会



(『曼荼羅図典』より)

尊である「四波羅密菩薩（金剛波羅密・宝波羅密・法波羅密・羯磨波羅密）」が取り囲んでいる。その下（東）には、金剛部があり、阿闍如来の周りには金剛薩埵・金剛宝・金剛愛・金剛喜が、南には宝部があり宝生如来の周りには金剛宝・金剛幢・金剛笑が、西には蓮華部（法部）があり無量寿（阿弥陀）如来の周りには金剛法・金剛利・金剛因・金剛語が、北には羯磨部があり不空成就如来の周りには金剛業・金剛護・金剛牙・金剛拳が座している。周囲の四部の如来の回りには四菩薩ずつがおり十六菩薩が座している。これを「十六大菩薩」という。大円輪の内側の四隅には、金剛嬉・金剛鬘・金剛歌・金剛舞の菩薩が描かれている。大円輪の外側には地天・水天・火天・風天の四大神を配している。その周りに金剛杵が取り囲んでいる。

第二重には、賢劫千仏という千体仏がぎっしり描かれており、四隅には金剛香，金剛華，金剛燈，金剛塗の四菩薩，四方（東南北西）には，金剛鉤・金剛索・金剛鑲・金剛鈴の四撰菩薩が配されている。

第三重（外縁）には、東に那羅延天・俱摩羅天・金剛摧天・梵天・帝釈天，南に日天・月天・金剛食天・彗星天・熒惑天，西には羅刹天・風天・金剛衣天・火天・多聞天，北には金剛面天・焰摩天・調伏天・毘那夜迦天・水天の二十天からなる。このうちの四大神と二十天を除いた諸尊を「三十七尊」と呼んでいる。成身会は千六十一尊で構成されている。図9を見て頂きたい。九会曼荼羅の成身会を出発点として，下の三昧耶会に下り，右回りに微細会，供養会，四印会，一印会，理趣会，降三世会，そして降三世三昧耶会に向かうことを「向下門」といい，その反対の方向に進むことを「向上門」という。向下門は仏（如来）→菩薩→衆生（明王）へと，仏による救済論を示しており，向上門は衆生→菩薩→如来へと，修行のあり方を示していると言われている。

### 3 金剛界曼荼羅（2）

瑜伽タントラの曼荼羅の集大成であるとされる「法界曼荼羅」は二百の神々によって構

(図11) 金剛界曼荼羅



(『マンダラと密教思想』より)

(図12) 金剛界諸尊の配置図



(『マンダラと密教思想』より)

成される規模の大きな曼荼羅と言われている。この法界曼荼羅の瞑想法を著したのがアバヤーカラグプタ (Abhayākara Gupta 11～12世紀) であり、彼の著書『完成せるヨーガの環』には曼荼羅の観想法が解説されている。

立川<sup>13)</sup>によれば、図11は『完成せるヨーガの環』に従って描かれた「金剛曼荼羅」であり、図12は五三尊を配置した図である。金剛界曼荼羅を構成する主な諸尊は三七尊である。この三七尊に十六人の菩薩を加えて五七尊に関して七つのグループに分けて考えられるという。

#### 第1グループ (五仏)

①大日如来, ②阿閼如来, ③宝生如来, ④阿弥陀如来, ⑤不空成就如来

#### 第2グループ (四金剛女)

⑥薩埵金剛女, ⑦宝金剛女, ⑧法金剛女, ⑨業金剛女

#### 第3グループ (十六大菩薩)

⑩金剛薩埵菩薩, ⑪金剛王菩薩, ⑫金剛愛菩薩, ⑬金剛喜菩薩, ⑭金剛宝菩薩,  
⑮金剛宝菩薩, ⑯金剛幢菩薩, ⑰金剛笑菩薩, ⑱金剛法菩薩, ⑲金剛利菩薩  
⑳金剛因菩薩, ㉑金剛語菩薩, ㉒金剛業菩薩, ㉓金剛護菩薩, ㉔金剛牙菩薩  
㉕金剛拳菩薩

#### 第4グループ (内の四供養女)

⑳金剛嬉女, ㉗金剛鬘女, ㉘金剛歌女, ㉙金剛舞女

#### 第5グループ (外の四供養女)

㉚金剛香女, ㉛金剛華女, ㉜金剛灯女, ㉝金剛塗女

#### 第6グループ (四門衛)

㉞金剛鉤, ㉟金剛索, ㊱金剛鎖, ㊲金剛鈴

13) 『マンダラ観想と密教思想』 p 77-82

## 第7グループ（賢劫十六尊）

③慈氏菩薩，③不空見菩薩，④減惡趣菩薩，④除憂闇菩薩，④香象菩薩，  
④大精進菩薩，④虚空庫菩薩，④智幢菩薩，④無量光菩薩，④月光菩薩，  
④賢護菩薩，④光網菩薩，⑤金剛藏菩薩，⑤無尽慧（意）菩薩，⑤弁積菩薩，  
⑤普賢菩薩

『完成せるヨーガの環』では、第1グループの五仏、第2グループの四金剛女、及び、第3グループの十六大菩薩の二十五尊が金剛界曼荼羅の中核をかたちづくっている。日本の金剛界曼荼羅の中心にある「成身会」では、大日如来のまわりに四金剛女、阿閼如来・宝生如来・無量如来・不空如来の四如来、そのまわりには十六菩薩が鎮座して二十五尊になっている。大円の中にある金剛嬉女・（第4グループ（内の四供養女））を加えれば、二九尊になる。大日如来と四仏（阿閼如来、宝生如来、阿弥陀如来、不空成就如来）の関係について供養という視点から次のように述べられている。

四仏の「妃」である四金剛女が大日のまわりに配されているのは、四仏それぞれが自らの力を中尊たる大日に供養したことを示している。この四仏による大日に対する供養に応じて大日が四仏に対してなす供養の具現が、第四のグループ「内の四供養女」である。金剛嬉女は心の喜びの、金剛鬘女は世界の莊嚴の、金剛歌女は生命の歌の、そして金剛舞女は世界の舞の神格化である。大日によるこうした活動に応じてさらに四仏が大日に対して供養するのであるが、第五グループ「外の四供養女」は今述べた「四仏による大日に対する供養」の具現である。香・華・灯および塗は供養法（プージャー）の供物としても最も一般的なものである。この第四・第五グループは大日と四仏との相関関係を供養という行為によって示している<sup>14)</sup>。

大日如来と四仏との密接なかかわり合いにより、一方が変化すれば他方も変化するといった諸尊の活動が「供養」という働きかけによって「聖化」するプロセスが金剛界曼荼羅の中に潜んでいる。そして、立川は次のように述べる。

実践者は大日およびその分身である四仏の活動を自らのものとする。それによって最終的には大日と自己との同一性を体得しようとするのである。もっとも自己を大日に没入させて自己が無になることを実践者は望むわけではない。「聖なる」大日との同一性を感得した後、聖化された「俗なるもの」として実践者の自己は存続する。「聖化された」個を獲得することが仏教タントリズムの核心である<sup>15)</sup>。

修行者は大日如来と四仏とのエネルギーの交流を自らの観想を通して身体化することで体得するのである。そして、修行者はその体得した聖化されたリアリティと俗なるリアリティとの往復運動をすることにより、タントリズムが理解できるという。その理解に関し

14) 『マンダラ観想と密教思想』 p 78-79

15) 『マンダラ観想と密教思想』 p 82

て、『金剛頂経』の第一「金剛界品」の第一章に「金剛界大曼荼羅」の説明があり、「金剛界曼荼羅の諸尊の出生」について述べている。立川<sup>16)</sup>によれば、そこには三段階による観想があるという。

- 1 第一ヨーガと名づけられた観想
- 2 最も勝れた曼荼羅の王と名づけられた観想
- 3 最も勝れた行為に王と名づけられた観想

第1段階において行われるのは、観想主体であるの中尊を確立するために行う「五相成身観」である。「五相成身観<sup>ごそうじょうしんかん</sup>」とは歴史的な釈尊がブツダガヤで悟った菩提の道場を金剛宝座に設定して、月輪と金剛杵を中心として瑜伽観想法を表している。「五相成身観」という五段階の観を修して成仏した仏陀は世界の須弥山の頂きにある金剛摩尼宝峯楼閣<sup>こんごうまにほうぶろうかく</sup>に赴き、四方に四仏を伴う毘盧遮那如来になり、そこで三十二の菩薩を出生して金剛界曼荼羅が出現したのである<sup>17)</sup>。

密教においては、「三密瑜伽」を重要視している。三密とは、仏の身（身体）、口（言葉）、意（心）の働きのことである。顕教においては、一切の行為（業=karman）としての、身（身体）・口（言葉）・意（心）の三種類があり、それを「三業」という。私たち凡夫の三業の世界から仏の三密の世界のリアリティに移ることを「三密瑜伽」という。

三密瑜伽を行うには、身体の働きとして「印」を結び（身密）、口から真言をととなえ（口密）、心の中では仏の境地に入る「三摩地<sup>さんまじ</sup>」（意密）行うのである。この三密瑜伽を行うことにより、修行者の身（身体）、口（言葉）、意（心）の働きが仏と同じ状態になったならば、「即身成仏」であるといえる。このような状態になるための瞑想法が『金剛頂経』における「五相成身観<sup>ごそうじょうしんかん</sup>」<sup>18)</sup>であり、この修行法は五段階にわかれており、順次修得していく内容である。

① 第一・通達菩提心<sup>つうだつ</sup>

通達菩提心とは、自己の心を一一つ観察することである。三昧のリアリティにより、「オーム、チッタプラティヴェーダム・カローミ（オーム、われは自心の源底に通達せん）」の真言を何度も誦し、月輪を観想する。

② 第二・修菩提心

修菩提心とは、菩提心そのものである。自らの心が清浄光明であることを体得するために、「オーム・ボーディチッタム・ウドパーダヤーミ（オーム、我は菩提心を発さん）」と一切義成就菩薩に対して真言を唱え、月輪を観想して菩提心を発す。

③ 第三・修金剛心

修金剛心とは、月輪の中に一切如来の確信である金剛杵を観想し、「オーム・ティシュ

16) 『マンダラ観想と密教思想』p 174-195

17) 『超密教時輪タントラ』P 16-17

18) 『金剛頂経』P 38-40

タ・ヴァジュラ（オーム、立て、金剛杵よ）」と唱え、堅固不動になった自らを確認する。

④ 第四・証金剛心

証金剛心とは、「オーム・ヴァジュラアートマコー・アハム（オーム、われは本性においてこの金剛杵に他ならず）」と唱え、自らの月輪に金剛杵を観想し、それらと心身が一体になることを体得する。

⑤ 第五・仏身円満

四段階の観想を順次習得することで最終段階に入る。仏身円満とは、「オーム・ヤター・サルヴァタターガターズ・タター・アハム（オーム、一切の如来らちがある如くに、その如くにわれはあり）」と唱え、心身共に仏と一体になり、自らの身体が一切の最勝の仏の身体であると認識すること。

第2段階では、金剛界曼荼羅に登場する諸尊（①十六大菩薩の出現、②四妃の出現、③八供養女の出現、④四門衛）の観想が行われ、曼荼羅全体の中に諸尊の姿或いはそれぞれの尊格のシンボルの形が、それぞれの位置に置かれる。図11、図12を参照していただきたい。

第3段階の、金剛界曼荼羅出現後の行者の行為には二つの異なった方向があるという。第一は完成した曼荼羅が修行者の心身の中へ取り込まれる方向のこと。第二は曼荼羅を自己に取り込んだ行者が他の衆生に対して働きかける方向のことである。

## 5) 後期密教の曼荼羅

インドでは8世紀以降に『金剛頂経』や『理趣経』の系統の瑜伽タントラの流れから、後期密教の時代に入る。「無上」とはこれ以上のタントラはないという意味である。無上瑜伽タントラは父タントラ、母タントラ、不二タントラの三種に分類されている。これらの父母両タントラは相互に影響を受けながら多様に展開している。『秘密集会タントラ』から発展した父タントラと、『ヘーヴァジュラ』を中心とする母タントラは、究竟次第の実修においても父タントラ系の究竟次第が「空」を、母タントラ系は「楽」をテーマにしていると言われている。そして、この「空」と「楽」の実践は輪廻転生の理論と結びつき、私たちがこの一生の間に成仏できる秘法となったという<sup>19)</sup>。インドで仏教が滅亡する直前に成立した『カーラチャクラ・タントラ（＝時輪タントラ）』（以降、時輪タントラ）は父タントラと母タントラを統合する不二タントラとして現れた。この時輪タントラはチベットを中心に発展したが、後期密教そのものは中国・日本には伝承されなかった。

### 1 秘密集会曼荼羅

『秘密集会タントラ』は後期密教を代表する父タントラ系の代表的な教典の一つである。無上瑜伽タントラの中で、最も早く成立したタントラであり後期密教を代表するものがある。

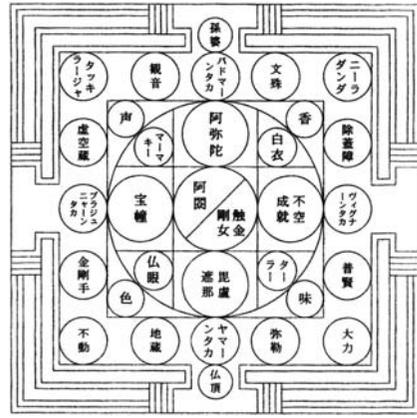
19) 『性と死の密教』P ii

(図13)



『インド後期密教(上)』より

(図14)



『性と死の密教』より

『秘密集会タントラ』は『金剛頂経』(『真実撰経』)を引き継ぎ発展したものである。『秘密集会タントラ』は後期密教の時代を通じて広く流布した。それゆえ、秘密集会タントラ系の曼荼羅には「聖者流」,「ジュニャーナパーダ流」,「インドラプーティ流」などの流派がある。図13と図14は聖者流の秘密集会タントラの曼荼羅である。

曼荼羅の中核となる五仏の構成の要素は金剛界曼荼羅の五仏(毘盧遮那如来 [大日如来], 阿閼如来, 宝生如来, 無量寿 [阿弥陀] 如来, 不空成就如来)と同じである。これらは五智あるいは色・受・想・行・識の五蘊を象徴している。

その四隅には四仏母(ロチャーナ [仏眼]・マーマキー [摩摩枳]・パンダーラ [白衣母]・ターラー [多羅])が描かれており、地・水・火・風の四大を象徴している。

四つの門を守る四忿怒(ヤマーンタカ [東門], プラジューナータカ [南門], パドマーンタカ [西門], ヴィグナータカ [北門])の四忿怒が配されている。聖者流ではこの13尊に、五金剛女(色金剛女・声金剛女・香金剛女・味金剛女・触金剛女)と八大菩薩(弥勒菩薩・地藏菩薩・金剛手菩薩・虚空蔵菩薩・世自在菩薩・文殊瞿沙菩薩・除蓋障菩薩・普賢菩薩)を加え、四忿怒を十忿怒(ヤマーンタカ [東], プラジューナータカ [南], パドマーンタカ [西], ヴィグナータカ [北], アチャラ (不動) [東南]・タッキーラージャ [南西]・ニーラダダ [西北]・マハーバラ (大力) [北東]・ウシュニーシャチャクリン (仏頭)・スンバラージャ (孫婆))にして、三十二尊の曼荼羅を用いている。

金剛界曼荼羅までは、宇宙の真理を具現化した毘盧遮那(大日)如来が中心に座していたが、秘密集会曼荼羅では、東方に配されていた阿閼如来が中心に座し、毘盧遮那(大日)如来が東方にとって移ったことが一番大きな変化である。この意味は、毘盧遮那が色蘊(物質を象徴する)を意味しており、阿閼如来が識蘊(意識を象徴する)とされることから、『秘密集会』は物質に対して意識をより根元的な存在として認めるものであり、一方曼荼羅の四隅には四仏母は描かれ、五仏が五蘊を象徴するのに対して、四仏母は地水火風の四大を象徴している<sup>20)</sup>。

仏教の根底に流れる教えは釈尊の悟りから始まる。釈尊は人間が生得的にもっている欲望が苦の原因であるとみなし、その欲望を滅して、正しい修行をすることで、涅槃に至ると教えた。「貧」(むさぼり)・「瞋」(いかり)・「痴」(おろかさ)を三毒煩惱と言ひ、涅槃に至る心の働きを邪魔するものとして否定されてきたのである。ところが、釈尊が滅して1200年程経過し、8世紀に入ると、釈尊の教えと正反対の考え方、欲望の充実が解脱への道だと示す後期密教が現れた。人間がこの世的に生きていくため(生存=サバイブ)には、「～したい」という「欲望」から逃れられないのならば、そのエネルギーを用いることにより、悟りへと導く方法がないかと考えたのである。まさに、発想の転換である。教条主義的に欲望を否定する出家修行者を嘲笑し欲望をいかしつつ涅槃を求めようとした。また空の思想をとく『般若経』においても人間の欲望を積極的に肯定する思想が述べられている<sup>21)</sup>。

それは欲望否定からすべての生得的な欲望、むしろ性欲を含む欲を肯定することによる解脱である。このような性に関することは、インドにおいては、女神の信仰、男性器や女性器を模った石などを礼拝する民間土着の宗教的な体系があり、それは性がもたらすエネルギーや、性行為によるシンボリックな意味での大自然への農作物の豊作や絶対的な存在への合一を意味していたことと多いに関係がある。

『秘密集会タントラ』の第1分の冒頭は次のような下りからはじまる。

「其の如く我によって聞かれた。一時、世尊は一切如来の身語心の心藏なる、諸の金剛女陰に住し給えり」。

「女陰に住する」とは、世尊がその妃と性的結合の状態であり、「女陰」が複数形になっているという。また「其の如く我によって聞かれた。一時、世尊は……」という文章は「世尊釈迦牟尼如来がいまや真理を説示せんとするとき」を示すセンテンスである。『秘密集会タントラ』では、その時、世尊は複数の女性と同時的な性的結合の状態に入っていたといい、このことを言葉とおりにとれば、奇怪な表現であると津田<sup>22)</sup>はいう。このタントラはまさに、冒頭から性的な生成理論とかかわっているといえる。

後期密教では、大胆に性の行法を取り入れたヨーガが説かれるようになった。当時の人たちは男女がセックスをすることで、母胎の中に胎児が宿り、出産して、成長し、次第に人としてなっていくことが宇宙の神秘そのものであったからである。このように「性」から「生」が生産され、そして「聖」なる領域につながるリアリティを発展させていくのである。

タントリズムには、近代的な倫理観に対して、反社会的で日常の規範を逸脱する多くの

20) 『マンドラ宇宙論』「コスモグラム・サイコグラムとしての曼荼羅」P 185

21) 『インド後期密教(上)』P 38-39

22) 『反密教学』P 206 『秘密集会タントラ和訳』P 3

思想と儀礼があった。これらのことは一般の人たちの嫌悪感を呼び覚まし<sup>ひんしゅく</sup>響 蹙をかう原因であった。しかし、その奥に流れる思想は「空」であり、すべてのリアリティがその一点に呑み込まれていくのである。『秘密集会タントラ』を和訳した松長<sup>23)</sup>によれば、性にまつわる事象以外に、以下のような内容が述べられている。

このタントラによって成就にもっともふさわしい者は、賤業に従事する最下層の者たちと大罪を犯した者であり、殺人者、虚言者、盗人、愛欲におぼれる者、糞尿を食するものたちこそが適任者であると言った世尊の意外な言葉に菩薩たちは卒倒するが、その深い意味を理解することで、自らの意識の覚醒を起こすのである。

また、「倫理性に欠ける食」のこと、「殺人の肯定」、「殺の呪法」など極度な反社会性に対して響蹙を買う内容が出てくる。仏教が執着することを避ける色・声・香・味・触の五境を、逆に悟りへの手段をする「五欲境」、五肉の大（人肉）・牛・犬・象・馬を食し、五甘露である糞・尿・精液・経血・油などを食することが成仏への道という。

次に「殺」に対する容認の問題を取り上げており、3つの傾向があると述べている。第一は殺生の意味についての解釈、第二は殺人という行為にたいする仏教的な意味、第三は殺生に用いられる呪法である。「秘密金剛によって、一切衆生を殺すべし。殺されたその者たちは、阿閼の仏国土において仏子となるであろう」この過激な言葉は「呪殺」の典拠となる。この文脈は、人を殺すのは、憎しみによってではない。相手に対する慈悲の心とその根底になければならないという。自らの名誉欲、金銭欲、憎しみによる殺人は明らかに殺人罪である。

そして、殺の呪法に関して、呪殺法、硬直法、恫喝法、粉碎法など恐ろしく響きの悪い呪法があるが、中には治病法、解毒法、隠身法などの穏やかな呪法もある。尸林（墓場）の灰や骨粉などを用いて、敵対する相手の「像」をつくり、毒草や糞尿を用い汚れた着物を着せ、怒りをあらわにし修法に当たれば、その相手は死に至るという。また怨敵が肉体を食い破られたりする観想をすることで相手に害を及ぼし死に至らしめるなどの呪法が記載されている。

このような本来仏教には存在しない様々な呪法が取り入れられているのは在野の行者集団の呪法を、仏教側に取り入れたと考えられている。

後期密教の瞑想法は、経典に書かれている尊格を視覚的に観想する「生起次第」とヨーガの技法を用い、生理学的な変化とともに宗教的な体験を得る「究竟次第」が基本の修行法である。『秘密集会タントラ』の「ジュニャーナパーダ流」では性理論と結びついた観想法が生起次第として成立をしている。次に、この実践階梯について田中<sup>24)</sup>の十二因縁の解説に従って説明する。

曼荼羅の生起に先だって、「三眞実」と称される<sup>オーン</sup>ॐ（白）、<sup>アーハ</sup>ॐ（赤）、<sup>フーン</sup>ॐ（青黒）の三種字が、虚空より行者自身の口に入ると観想する。これらの三種字は、仏の身口意を象徴す

23) 『インド後期密教（下）』P 64-74

る毘盧遮那・阿弥陀・阿閼の三尊のシンボルである。

色に関して、白は受胎時瞬間における精液、赤は経血、青黒は体内に取り込まれた死者の意識を象徴している。真言を唱えながらそれらが実体のないものと思念する過程が「無明」に相当する次第である。

次に、曼荼羅の楼阁の中には、諸尊の座となる日輪と月輪を観想する。そして、中央の月輪の上に、さらに二つの月輪を観想する。左の月輪には白色の十六の子音字、右の月輪には赤色のカからハまでの子音字を観想する。この二つの月は受胎における父と母の要素が象徴されている。そして、二つの月輪の中観には火あるいは熱エネルギーを象徴する<sup>フ</sup>字が観想され、それによって二つの月の輪が溶解して、放射された光明から<sup>フ</sup>字とその<sup>フ</sup>からさらに金剛杵が生じ、その金剛杵がさらに転じて持金剛仏の身体が完成すると観想する。ここで誕生する持金剛は、曼荼羅の諸尊全てを出生する根源的存在なので「因の持金剛」と呼ばれる。以上は「自利円満」、つまり自らのために成仏する次第といわれる。そして、金剛界自在母という女尊を観想し、その女尊を自らの口から体内に入れ、尿道から体外に放出し、宇宙大の女性器の形態となる。そして、四仏母と五金剛女をつぎつぎと自らの体内から尿道を通して、金剛界自在母に変容した女性器の中に放出されると観想する。このようにして、『秘密集會』曼荼羅に描かれているすべての尊格を出生した後、成仏した仏がすべての衆生を救済する次第といわれている。これが十二因縁の「識」にあたる次第である。次に、ここまで観想してきた諸尊の影像をいったん消滅させ、抽象的な法身の段階に留まっている持金剛仏を勧請させる。これに応じて持金剛は、衆生を救済させるために色身を出現させる。これが、十二因縁の「名色」に相当する次第である。ここにおいて三面六臂を有する文殊金剛が出現する。文殊金剛の眼耳鼻舌身意の六つの感覚器官には六菩薩と六金剛女が布置される。これが十二因縁の「六処」に相当する次第である。そして、六つの感覚器官には六菩薩と六金剛女を布置することで、六つの超人的な感覚機能が獲得される。

これは、十二因縁の「触」に相当される。そして、感覚器官を加持した後、心臓に意金剛、喉に口金剛、頭に身金剛の三尊を布置し、身（身体）・口（言語）・意（精神）の三業を加持するのが十二因縁の「受」に相当する次第である。次に虚空界に偏在する一切如来を勧請することで、行者は文殊金剛と一体化し、自らの部主つまり阿閼如来を宝冠中に戴くようになる。これが十二因縁の「愛」に相当する次第である。いよいよ、文殊金剛の配偶者となる明妃が出現する。すでに主尊と一体化した行者は自らの金剛杵すなわち男性器をフーン字によって加持し、真言とともに性行為を始める。そして、曼荼羅の主尊文殊金剛と妃のマーマキーが生まれ、曼荼羅の中心に座をしめる段階が十二因縁の「生」と「老死」に当てはめられている。このような性の儀式化は受胎のプロセスをシミュレートすることによって成立している。

## 2 ヘーヴァジュラ曼荼羅

『ヘーヴァジュラ・タントラ』は後期密教を代表する母タントラ系を代表的する教典の一つであり、本尊はヘーヴァジュラと呼ばれる忿怒神である「ヘルカ」である。ヘルカは一面二臂をもち、右手に金剛杵、左手には骸骨の杯と髑髏を付けた杖、足には死体を踏みつけた、舞踊のポーズをとり、髪の毛は炎のように逆立ち、三眼で忿怒の相をもち、このようなイメージはヒンドゥー教の「シヴァ」と重なると言われている<sup>25)</sup>。中世のインドにおいて、仏教のみならず、ヒンドゥー教、ジャイナ教など、宗教の枠を超えて、「性」を重要なテーマとして流行したという。中世インドでは、ヒンドゥー教のシャクター派が隆盛を極めるようになり、インド土着の信仰から生け贄などの血の儀式や男女による性的儀礼を取り入れていた。その対抗手段として母タントラに頻出する仏典らしからぬ卑猥な表現を仏教的に解釈しなすことで、仏教を広める意図がそこにあった<sup>26)</sup>。この頃の土着宗教を取り込んだ宗教を「尸林しりんの宗教<sup>27)</sup>と呼んでいる。「尸林」とは、古代インドの葬儀であり、死者の遺骸は尸林に運ばれるか、放置され鳥獣に食うにまかされた。また尸林は刑場をかねており、罪人の遺骸や見せしめのための遺体もあり、尸林は魑魅魍魎の世界であった。仏教の僧侶たちは尸林に出かけ、肉体に対する執着を捨てるために遺骸が朽ち果てる姿を観察したと言われている。また、尸林には巫女により女神が祀られており、彼女たちは性瑜伽の技法をもちいたことからヨーギニー（瑜伽女）、黒魔術的な秘儀による関わりからダーキニー（拏吉尼）と呼ばれていた。『ヘーヴァジュラ・タントラ』においても、『秘密集会タントラ』に述べられている「倫理性に欠ける食」、「殺人の肯定」、「殺の呪法」など極度な反社会的・反倫理的な内容が出てくる。汚物や人肉を食べる、人のものを盗む、他人の妻との姦通する、真夜中に公然と性交する、人を殺すなどの反社会的・反倫理的な悪行を行えという。このような内容は、現代人である私たちの嫌悪感を呼び起こす。このような反社会的・反倫理的な行動は、それらの行為にとらわれるな、慈悲をもって行い、俗世の現象として起こっていることは、善も悪もなく、全て幻影であり、「空」のリアリティを体感することであり、何も存在しないという実感を体得するためである。

ヘーヴァジュラ曼荼羅には尊数を九尊、十七尊とするものなどがある。図15がヘーヴァジュラ曼荼羅である。図16はヘーヴァジュラ曼荼羅の中心にある方形の部分の九尊が描かれた図であり、図17は、九尊の位置を示した図である。

中心を番号1として、その回りに2～9まで番号がふられている。

1ヘーヴァジュラ（阿闍），2ガウリー（阿闍），3チャウリー（毘盧遮那）4、ヴェターリー（宝生），5ガスマリー（阿弥陀）は五仏と関係づけられている。6プッカシー，7シャバリー，8チャンダリー，9ドーンビーは四人のダーキニーであり、地・水・火・風の四大元素を象徴し、四仏母と同じ働きを与えられている<sup>28)</sup>。『ヘーヴァ

25) 「ヘイヴァジュラ・タントラ」『インド後期密教（下）』P 52

26) 『図解チベット密教』P 114

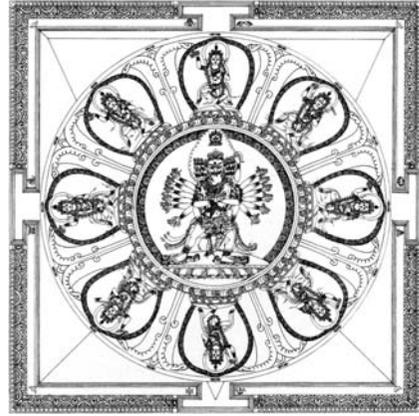
27) 『性と死の密教』P 75, 『反密教学』p 281

(図15) ヘーヴァジュラ九尊曼荼羅



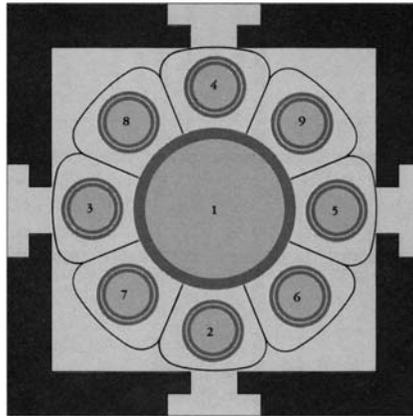
(『インド後期密教(下)』より)

(図16) ヘーヴァジュラ九尊曼荼羅



(『マンダラ観想と密教思想』より)

(図17) ヘーヴァジュラ九尊曼荼羅 (略図)



(『曼荼羅イコノロジー』より)

ジュラ・タントラ』の本尊は、ヘーヴァジュラと呼ばれる忿怒尊（ヘルカー）である。ヘーヴァジュラはナイラーモミヤー（無我女）という明妃を抱いた姿をとっている。

無上瑜伽タントラの瞑想法は、尊格をイメージし一体化する「生起次第」と行者の身体内の脈管とチャクラをコントロールする「究竟次第」の2つのプロセスにおいて行われることはすでに述べた。立川<sup>29)</sup>によれば、『ヘーヴァジュラ・タントラ』の生起次第の瞑想は以下のように行われるという。

瞑想の準備段階として、禪定の姿勢をとり、観想すべきヘーヴァジュラやその周囲に立つ女神などをイメージすることで観想の「核」を創り出す。次に仏・法・僧の三宝に帰依

28) 『曼荼羅イコノロジー』P 213-214

29) 『密教思想とマンダラ観想』P 560-561

した後、観想の「核」を行者の身体内に納める。行者自らの身体内の「核」から恐ろしい秘密仏ヘールカが出現する。このヘールカが、後にヘーヴァジュラとして現れる。ヘーヴァジュラ曼荼羅の中心メンバーであるヘールカと八人の女神が出現する。このメンバーをイメージしながら、行者は自らの罪障の告白と懺悔をし、菩提心を起こす瞑想をするのである。

瞑想の実質的な段階として、空性をイメージすることから始まる。観想によって生まれてくる私たちの姿は空性の働きによって仮に現れたに過ぎない。空性がイメージ化されることで、曼荼羅の大まかな立体構造が現れる。次に、曼荼羅の中心的構造の中に、円盤の形をした守護輪（ラクシャーチャクラ）が現れる。これは周囲に鋭い刃をつけており、その歯を回転させることにより、煩惱という敵を消失させる。そして、守護輪の上に世界を構築している物質的な四元素（地・水・火・風）が積み上げられるが、それらの元素が攪拌され拡散した後に宮殿が現れる。この宮殿の中にヘーヴァジュラと八人の女神が立ち並ぶ。宮殿の八方には八つの尸林がイメージされることで、聖と俗が一体化した館（＝「器」）が完成する。この館の住人であるヘーヴァジュラたちが観想される。ヘーヴァジュラの出現には、「因」の状態と「果」の状態の二段階があるという。いずれの状態のヘーヴァジュラが現れた場合であっても、その周囲に立つ女神が生まれるのである。ヘーヴァジュラは世界そのものであり、行者もその世界と融合しているがゆえにヘーヴァジュラそのものを生きることになる。

### 3 カーラ・チャクラ（時輪）曼荼羅

10世紀から11世紀にかけて、父タントラと母タントラの二つの潮流が『カーラ・チャクラ（＝時輪，以降時輪と表示）タントラ』として統合された。『時輪タントラ』の特徴は、密教の歴史の流れをすべて含んだ上で、インド仏教の歴史の中で最後に成立した聖典であり、その中には、母タントラに影響を受けた「時輪大サンバアラ曼陀羅」と父母両タントラを統合した「身口意具足時輪曼荼羅」がある。

日本において『時輪タントラ』の研究は、先駆者である羽田野伯猷氏がおこなっていたが、サンسكريットの原典さえも入手が困難な時期を経て、現在は時輪タントラの研究は田中公明氏の研究に負うところが多い。田中<sup>30)</sup>は時輪タントラについて次のように述べている。『時輪タントラ』の存在は、名のみは知られていたが、その内容も秘密のヴェールに包まれており、全体が極めて難解なうえ、その体系に熟達した学者が少なかった。1959年のチベット動乱以降、インドに亡命したダライ・ラマ14世が、世界各地に分散した亡命チベット人のために「時輪の大灌頂」を行い、この未知の密教体系に西洋人の興味を喚起した。現在は、新たにチベット仏教に入信した欧米人や東洋人のために行われおり、欧米の学会では『時輪タントラ』への関心が高まっている。田中が1994年に『超密教時輪タントラ』（東方出版）を刊行した時点では欧米でもマニュアルを除いては、総合的な概説書

30) 『インド後期密教（下）』P 174

(表2) 『時輪タントラ』の教理

章 題	サンスクリット名	主な内容	三つの時輪
①世間品	Lokadhātupaṭāla	宇宙論・天文暦学	外の時輪
②内 品	Adhyātmapaṭāla	衆生の身体構造と生理学	内の時輪
③灌頂品	Abhiṣekaṭāla	灌頂と身口意具足曼荼羅	別の時輪
④成就品	Sādhanaṭāla	生起次第 と	
⑤智慧品	Pañcamapaṭāla	究竟次第	

(『超密教時輪タントラより』)

は一冊もなかったと言う。

『時輪タントラ』の教説の一つとしてシャンバラ伝説がある。シャンバラは中央アジアの某所にあるとされている理想郷の物語である。シャンバラの王スチャンドラは、釈尊が南インドのダーヤタカで『時輪』の根本タントラとされる『吉祥最勝本初仏タントラ』を説いたときこれを聴聞した。スチャンドラは本国に戻りこの内容を住民に伝えたと言われており、チベット仏教ではプトウンなどによる研究が『チベット大蔵経』に収められている。

教理の体系については、表2の『時輪タントラ』の教理で示している<sup>31)</sup>。その内容は「外・内・別」の三つに要約される。「外」とは第一章の世間品に説かれている仏教の伝統的宇宙観である。「内」とは、第二章の「内品」では金剛身を得るためにヨーガでいうチャクラ・風(=気)・滴・脉管などの身体生理学のことで、内なる身体宇宙として捉えている。

「外の時輪」は宇宙のマクロコスモスを示し、「内の時輪」は人体のミクロコスモスを表している。仏教が誕生する以前、インドでは宇宙(大宇宙)と自己(小宇宙)が同一であると考えられていた。初期ウッパニシャッド群は宇宙の根本原理ブラフマン(梵)と私たち一人ひとりに内在するアートマン(個我)は本来同一であり、それを「梵我一如」と捉えていたのである。第三章以下は、この大宇宙のマクロコスと微細な身体としてのミクロコスモスが対応しており、衆生であるがゆえに「灌頂」が必要であるとされる。

「別」では、第三章以下に説かれる身口意具足時輪曼荼羅の内容と『時輪タントラ』独特の生起・究竟の二次第の体系を意味している。第三章の「灌頂品」では、子どもの発達段階を再体験する七つの灌頂を辿る儀軌が説明されている。第4章の成就品では第三章で修行を得たものが行う修行法が具体的に書かれており「生起次第」と「究竟次第」がある。生起次第とは密教經典に説かれている尊格を観想し一体化することであり、その延長線上に究竟次第がつながっており、ヨーガを用いて生理的に仏陀が体験した意識の状態を作り出すことで身体変容を促す修行である。第五章の「智慧品」では、大衆と空の不二の境地に至る時輪の悟りの世界が説かれている。究竟次第では俗世と自らの行いと思考を粉碎し、心身が次元を超え微細になることで、大印の智慧を得るのである。しかし、「内容は様々

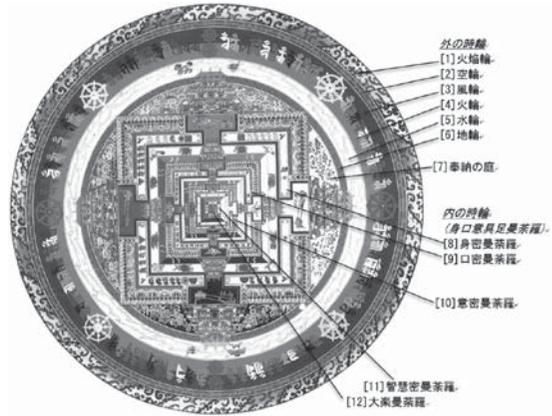
31) 『超密教時輪タントラ』P6

(図18) 時輪曼荼羅



(『超密教時輪タントラ』より)

(図19) 時輪曼荼羅の構造



(『カーラ・チャクラ (時輪) マンダラの臨床心理学的一考察』より)

な暗号、隠語的表現が散りばめられており、タントラ本文のみから内容を把握することは難しい<sup>32)</sup>といわれている。

図18は「時輪曼荼羅」であり、その構造を示したものが図19である。図19の図における、外の時輪は宇宙を表しており、「火焰輪」, 「空輪」, 「風輪」, 「火輪」, 「水輪」, 「地輪」で示されている。宇宙は虚空から生じることから始まる。この虚空の裂け目から、物質の構成要素である「地」・「水」・「火」・「風」・「空」の微細な5元素がエネルギー化して、時間の経過とともに集積されることで須弥山とそこを回転する天体の動きが形成されたのである。このような宇宙論は、アビダルマ仏教の伝統を引き継いだ世親の『俱舍論』では、器世間<sup>うじょう</sup>と有情世間<sup>しゆみせん</sup>とに分けられている。器世間とは、世界の中央に須弥山がそびえ、その四方に四大陸（四大州）があるとされ、私たちが住む地域は須弥山の南の州にあり、月と太陽は須弥山の中腹を回っている。有情世間とは、我々人間を含めた生類のことであり、その発達過程にも言及している。このような宇宙観をイメージしたのである。また、『初会の金剛頂経』では、釈尊がブツダガヤで悟りを開いた後、色究竟天に昇り成仏し須弥山の頂上に上り、金剛界曼荼羅を化現した。大日如来の座は須弥山の楼閣に置かれ、四仏の座は四大州に置き換え説明されたのである。このように、世間が形成されるがゆえに「衆生」である人間もエネルギー体だけの「微細な身体」から物質としての「粗大な身体」へと生成された。その生理学的な内容が第二章の内幕で述べられている。俱舍論の「器世界」と「有情世界」は時輪タントラでは外側の円環である「外の時輪」と内側の四角形が「内の時輪」に対応する。

図20は内の時輪を示したものであり、外から身密曼荼羅、口密曼荼羅、意密曼荼羅、大樂輪と分けられており、「身口意具足時輪曼荼羅」と呼ばれている。この構造の中で斜めの線で描かれている四領域と中心にあたる円を含めると五領域がある。表2で示されてい

32) 『超密教時輪タントラ』P4



ディープター、東南にドゥーマー、西南にマーリーチー、東北にカドョーター、西北にプラディーバーと八尊の女神たちが描かれている。

### 「時輪」の七種の灌頂（イニシエーション）過程

密教の教えを受ける前には、必ずその教えの灌頂（イニシエーション＝通過儀礼）を受けなければならない。時輪タントラで灌頂は十一もしくは十五で成り立っているが、他のタントラに比べれば灌頂を受けるときの規制が少ないと言われている。それゆえ、ダライ・ラマ14世は世界を回り多くの人たちに時輪タントラの灌頂をさずけているのである。時輪タントラの本質は「他のもののために悟りを目指す心（菩提心）と空を認識する意識（智慧）」<sup>34)</sup>であるといひ、「イニシエーション灌頂」のはじめの七つの過程とそれを受ける意味を以下のように述べている<sup>35)</sup>。

（表4）「幼少時を再体験する七つの灌頂」<sup>36)</sup>

	灌頂	灌頂における道具	浄化と姿を変えるもの	幼少時の発達段階
1	水灌頂	水	五大一五仏母	新生児の沐浴
2	宝冠灌頂	宝冠	五蘊一五仏	はじめての散髪
3	布帛灌頂	絹リボン	10の風（氣息）	耳飾りをつける
4	金剛杵と金剛鈴灌頂	金剛杵と鈴	脈管	笑うこと 話すこと
5	行為灌頂	指輪	6つの感覚器官と対象	感覚の享受
6	名前灌頂	腕輪	6つの活動器官とその働き	命名
7	許可灌頂	五仏の持ち物		読み書きをする

時輪タントラにある七つの灌頂のプロセスは、「幼少時を再体験する七つの灌頂（The seven initiations in the pattern of childhood）」と呼ばれている。表4を参照されたい。灌頂は①水、②宝冠、③布帛、④金剛杵と金剛鈴、⑤行為、⑥名前、⑦許可の七つの段階に分かれており、この過程が乳幼児の発達過程に喩えられている。この灌頂は師である阿闍梨が、弟子（修行者）を菩薩の境地に導くために行われる。師が灌頂における道具を用い、弟子の心身を様々な仏に変えて浄化していく。師と弟子は祈願文、真言、供養文を唱え、イメージを用いて仏と一体になる観想を用いて行われる。「幼少時を再体験する七つの灌頂」は「生起次第」に向けて、精神の連続性を成熟させ、菩薩の一番目から七番目までの境地を得るための潜在力をもたらししてくれる。しかし、本来の菩薩の境地は「究竟次第」の後に行われる修行において達成されると説いている。菩薩とは直接「空」を認識したものを示すために、修行者は七番目の許可灌頂までを終わらせても菩薩とは言えない。だが、功德を積むという視点でとらえると、七番目のプロセスを歩んだ修行者は菩薩の境地に等しいと言われている。

34) 『ダライ・ラマの密教入門』P4

35) 『Kalachakra Tantra Rite of Initiation』p279, 『ダライ・ラマの密教入門』P162, 199

36) 『図説曼荼羅大全』P200「七種の灌頂と成法との関係」の図を筆者がコンパクトにまとめ直した図である。

## 付記

この論文に関しては、大阪経済大学の国内留学制度を用いて、2015年4月から9月まで高野山大学密教文化研究所に留学することができたことが大きい。ここに大阪経済大学に感謝をしたい。また快く受託研究員として受け入れていただいた高野山大学学長 藤田光寛教授、密教文化研究所所長 奥山直司教授、両先生に多大なるお礼を述べたい。高野山大学の非常勤講師であり、四国八十八ヶ所霊場第二十八番・大日寺住職の川崎一洋先生には後期密教の講義を受けさせて頂き、門外漢の小生を導いていただいたことにお礼を申し上げたい。昨年の10月以降も受託研究員を続けさせて頂いており、曼荼羅研究が継続できていることに感謝の意を述べたい。

## 文献

- 青原令知（編）（2015）：俱舎—絶ゆることなき法の流れ—。自照社出版。
- アナスア・ダス（2015）（訳）福山泰子：インド仏教美術序説。INDIAN BUDDHIST AET FROM INDIAN MUSEUM, KOLKATA（特別展コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏 仏教美術の源流）。日本経済新聞社。
- ブラウエン, マルティン（1995）。The Wheel of Time Sand Mandala. HarperCollins Publishers
- Brauen, Martin（訳）森雅秀（2002）：図説曼荼羅大全。東洋書林。
- ドライ・ラマ14世 デンジン・ギャムツォ（1995）（訳）石濱裕美子：ドライ・ラマの仏教入門。光文社。
- 八田幸雄（1988）：秘密マンダラの世界。平河出版社。
- 川崎一洋（2005）：後期密教の源流。松長有慶（編著）：インド後期密教（上）。
- 乾 仁志（2004）：マンダラの瞑想と儀礼。高野山大学 P 34-40。
- 井上ウィマラ・葛西賢太・加藤博巳（編）（2012）：仏教心理学キーワード事典。春秋社。
- 藤原朋子（2016）：カーラ・チャクラ（時輪）曼荼羅の臨床心理学の一考察 大阪経大論集 第66巻第6号。
- 勝又俊教（編）（1968）：弘法大師著作全集 第一巻。山喜房佛書林。P 50-52。
- 金岡秀友（訳）（1985）：空海即身成仏義。太陽出版。P 111-119。
- 増田秀光（1994）：チベット密教の本 死と再生を司る密教の教え。学習研究社。
- 三田覚之（2015）：四相図。インド仏教美術序説。INDIAN BUDDHIST AET FROM INDIAN MUSEUM, KOLKATA（特別展コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏 仏教美術の源流）。日本経済新聞社。
- 森 雅秀（1997）：マンダラの密教儀礼。春秋社。P 19-26。
- ク （2007）：生と死からはじめるマンダラ入門。法蔵館。134-136。
- ク （2008）：曼荼羅事典 100のキーワードで読み解く。春秋社。
- ク （2006）：「ヘーヴァジュラ・タントラ」松長有慶（編著）：インド後期密教（下）。春秋社。
- 中村元・田辺祥二（1998）：ブッダの人と思想。日本放送出版会。
- 中村元ら（編）（2002）：岩波 仏教辞典 第二版。岩波書店。
- 田中公明（1985）：曼荼羅の歴史と発展について。チベット文化研究所。
- ク （1987）：曼荼羅イコノロジー。平河出版社。
- ク （1993）：チベット密教。春秋社。

- 〳 (1994)：超密教時輪タントラ. 東方出版.
- 〳 (2014)：図説チベット密教. 春秋社.
- 〳 (1996)：コスモグラム・サイコグラムとしての曼荼羅. 立川武蔵（編）曼荼羅宇宙論. 法蔵館.
- 〳 (2004)：両界曼荼羅の誕生. 春秋社.
- 〳 (1997)：性と死の密教. 春秋社.
- 〳 (2010)：インドにおける曼荼羅の成立と発展. 春秋社. P 14-15.
- 松原智美 (2008)：曼荼羅の世界とデザイン. グラフ社. P 4.
- 松長有慶 (2010)：大日経住心品講讃. 大法輪閣. P 10.
  - 〳 (2005)：秘密集会タントラ. 松長有慶（編著）：インド後期密教（上）. 春秋社.
  - 〳 (2000)：秘密集会タントラ和訳. 法蔵館.
- 宮坂宥洪 (1992)：和訳大日経. 東京美術. P 9-10.
  - 〳 (2006-a)：胎蔵界曼荼羅の見方・考え方. 小山弘利（編）：大法輪 特集Ⅱ これで分かる<曼荼羅>. 大法輪閣. P 76-79.
  - 〳 (2006-b)：金剛界曼荼羅の見方・考え方. 小山弘利（編）：大法輪 特集Ⅱ これで分かる<曼荼羅>. 大法輪閣. P 70-75.
  - 〳（編）(1983)：弘法大師空海全集第二巻. 筑摩書房. P 237-234.
- 野口圭也 (1999)：後期密教の思想と実践. 立川武蔵・頼富本宏（編）インド密教. 春秋社.
- 佐和隆研（編）(1995)：密教辞典. 法蔵館. P 216, 241-242, 221, 595,
- 染川英輔ら（編）(2013)：<縮印版>曼荼羅図典. 大法輪閣. P 243-250,
- 田上太秀 (2000)：ブッダのいいなかったこと. 講談社.
- 田上太秀 (2011)：図解ブッダの教え. 西東社.
- 立川武蔵 (1996)：神々の降り立つ超常世界 マンダラ. 学習研究社.
  - 〳 (1999)：インド密教の歴史的背景. 立川武蔵・頼富本宏（編）インド密教. 春秋社. PP. 23~24.
  - 〳 (2006)：マンダラという世界. 講談社. PP. 185-186.
  - 〳 (2013)：ブッダから仏へー原点から読み解く仏教思想一. 岩波書店.
  - 〳 (2015)：マンダラ観想と密教思想. 春秋社. PP 63-64.
  - 〳 (1996)：マンダラ宇宙論. 法蔵館.
- 津田真一 (1995)：和訳 金剛頂経. 東京美術.
  - 〳 (2008)：反密教学. 春秋社.
- 梶尾祥雲 (1927)：曼荼羅の研究. 高野山大学出版部.
- 頼富本宏 (1991)：曼荼羅の鑑賞の基礎知識. P 32-34.
  - 〳 (2004)：すぐわかるマンダラの仏たち. 見聞社. P 20-42.
  - 〳 (2013)：初期密教經典の曼荼羅. 高橋尚夫・木村秀明・野口圭也・大塚伸夫（編）初期密教一思想・信仰・文化一. 春秋社.
  - 〳 (2000)：『大日経』入門 一慈悲のマンダラ世界一. 大法輪閣.
  - 〳 (2005)：『金剛頂経』入門 一即身成仏への道一. 大法輪閣.
- 山折哲雄（編）(2000) 仏教用語の基礎知識. 角川書店.